ムジナの踊り

露木　浩

治（おさむ）は六人兄弟の末弟で小学六年生。小柄で痩せているが、利発で活発、児童会長だ。

学校から帰ると土間の奥のかまどの大きな鍋に蒸かしてあるサツマ芋を、ポケットに入れて、友達と山の広場でチャンバラごっこ。

母が行商で熱海の八百屋に出向く早朝、野菜を詰め込んだボウラ[*注]に入りきれない残りものを風呂敷に包んで、眠い目をこすりながら暗い坂道を一緒に国鉄の線路に向かって歩いて登って行く。母の肩にくい込んだ重荷を少しでも楽にしてあげたい思いで。線路脇を歩いて行くと真っ暗なトンネルに入る。電車が来るとコンクリ壁に掘られた狭いトンネル待避所（窟）に、身を寄せ合って列車の通過を待つ。ものすごい風だ。

函南駅はもうすぐ、足取りも軽くなる。

電車には通勤客がかなりいて、母と連絡器の所で熱海駅まで荷物を背負ったまま、立っている。ボウラは大きな布で覆われている、お客さんに迷惑が掛からないように。

静かな山道の右側に竹やぶがあり、〈ギャーギャー〉と動物のような鳴き声が聞こえる。

「母ちゃんちょっと待って、見てくる」

「早くしないと遅れるよ」

竹やぶの中を覗くと小さな横穴に何か光るものが見える。〈キュン、キュン〉

（なんだろう?）

正体がわからないまま、急いで引き返す。

八百屋さんで荷物を下ろすと、主人が寝間着姿のまま「おお、よく手伝いができるな」と言ってアイスキャンデイを出してくれる。冷たくて歯にしみる。今日のお駄賃だ。

帰りに高台の線路からかすかに見える我が家の煙突から白い煙が上がっている。祖母が朝食の準備をして

いる。そして学校だ。

竹やぶのあの光るものが気になって仕方がない。

ある寒い朝、治は懐中電灯を持って穴倉の探索に出かけると、かすかに動く気配とあの鳴き声が。目を見開いて中を覗くと、こげ茶色の丸々とした毛皮を羽織ったような動物が三匹。大きいのが二匹、その間に小さいのが一匹、そして光っている目が六個。

(真ん丸な顔、大きな目、小さな鼻、口の周りにひげ、アナグマみたい。違うな、ムジナかな?親子だ、震えている、ジーと俺を見つめている、なんだろう?初めて見る動物だな!)

父にその事を話すと「昔からこのあたりにいるムジナかな。万平爺さんが丸裸にされたという噂があったよ。ムジナは人間を化かすことがあるらしい、近づかないほうがいい」

「ウン、でも・・・」

その頃、竹やぶを伐採したり、焼き払ったりして整地作業が行われて、大地がむきだしになっていた。

ある晩、あの穴に行ってみると、三匹の動物は子どもを真ん中にして、痩せて、ぐったりしていた。穴の周りは草もなく、焼け焦げた地肌が残っているだけだ。

「どうしたんだ?病気か?喧嘩したのか?ご飯がなくて腹ペコなのか?」

「そうだ、野焼きのせいだ。好物のタケノコの芽やキノコが無い。餌に困って腹が減っているんだ」

(何とかしてあげないと、飢え死んでしまう。サツマイモ、なす、キュウリ、トウモロコシなどバケツ一杯にして、水も持っていこう)

父と母も治の気持ちを分かって、手伝ってくれた。

両手に食べ物と水を持って穴に急いだ。三匹はけげんそうに警戒するような素振りだったが、「ほら、ご飯だよ、美味しいよ、食べな」と差し出すと、おそるおそる鼻をクンクンさせながら、ものすごい勢いで食べ始め、全部平らげてしまった。

「よかった、美味しそうに食べたぞ、これで元気になれるぞ」

その日から毎日ご飯を届けに行った。治が来るのを待っているかのように、上半身を穴の外に出して前足を動かしていた。

それから数日後、母と行商に行く早朝、突然三匹のムジナが目の前に現れて、鳴き声をあげながら〈キュッ、キュッ、ギャ、ギャ〉と頷きあって踊り始めた、子どもを真ん中にして。

後ろ足をピョン、ピョンと跳ねながら、短い前足を交互に上げ、手のように器用に前後左右に動かし、背筋を伸ばし、顔を振りながら、お辞儀をしているようだ。子どもは両親の真似をして精一杯。

「うわームジナの親子が踊っている！可愛い、おもしれー、だいぶ太って踊るのが大変そうだけれど」

「治に食べ物のお礼をしているんだよ、嬉しそうだね」

治は「すごく上手だな。大変だったね。ありがとう、元気になって本当に嬉しい」と言いながらその場を離れると、三匹は姿が見えなくなるまで、目を凝らしながら、見送ってくれた。突然、子どもが飛び出して追いかけて来た。

「ママのおっぱいが出なくて、腹ペコだったけど、お兄ちゃんのおかげで元気になった。パパが『お礼にダンスをしてあげよう』と言って、たくさん練習をしたよ。僕も真似をして一生懸命覚えたんだ。だからもっ

と遊んで欲しいよ、お兄ちゃん」目に涙を浮かべていた。
「治くん、ムッちゃんと友だちになってね」と走ってきたママの声。
「もちろん、ずうーっとね！可愛いムッちゃんのお兄ちゃんだよ、大きくなるんだよ、バイバイ」
「春になれば新芽がでて、好物の食べ物も見つかるね」
「そうなるさ」母の声。

中学生になって間もなくあの場所に行ってみたが、住処は空っぽだった。
ムジナとの出会いと別れの一部始終を社会科の清水先生に話すと、「上沢地区は野山の自然と住宅造成が混在していて、彼らの住まいが狭められ、動物と人間の共存・共生に変化が起こっているね。これから治君たち皆が真剣に考えていかなければならない課題だよ」と教えてくれた。
「ハイ、先生、勉強します」と治は答えた。
（どこに行ってしまっただろうか？食べ物が見つかる新しい住まいで親子三人暮らしているといいな。大丈夫だ、困っていたらまた助けに行ってあげられるから）
（昔の悪さをしていた？ムジナなんかじゃない。動物とだって仲良くなれる、友達になれる、僕たちは同じ生き物だから。お互い心で分かりあえる、そして家族にもなれるんだ、僕たちにもできることはある！）
治は「ムッちゃん！僕らはいつまでも親友だよ。今度は仲間を連れてくるよ。その時まで元気でいてね。また遊ぼう、踊りを見たいよ！」と、山に向かって大声で叫んだ。
《はーい。有難う・・・》

《注》ボウラ…竹で編んだ背負いかご

ムジナの踊り

2026 年 10 月 24 日　発行

著者　露木　浩

令和 8 年度 函南町立図書館 8 月～11 月 Y A 展示・企画冊子
編集・発行　函南町教育委員会教育部生涯学習課（函南町立図書館）
電話番号　055-979-8700
住所　419-0122　静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとします（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること）。ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。また、すべての文章は原文のままとし、当館で校正・校閲作業は行っておりません。

治は心優しい小学校六年生。行商の母に同行途中で出会った【ムジナ】親子を助け、絆を結ぶ。彼らの踊りは最高の感謝である。

人間と動物の友愛を描いているが、両者の共生という課題が見えてくる。

